

アコークロー

2007(平成19)年4月24日鑑賞(松竹試写室)

★★★



監督・脚本＝岸本司／出演＝田丸麻紀／忍成修吾／エリカ／尚玄／結城貴史／菜葉菜／吉田妙子／山城智二／手島優／友情出演＝村田雄浩／清水美砂(彩プロ配給／2007年日本映画／97分)

第7章

恐怖、戦慄、摩訶不思議

……この映画の売りは、「初めて明かされる琉球奇譚！」どの地方にも幽霊、精霊、妖怪伝説があるものだが、「エイリアン」や「あまんじゃく」に対応する沖縄のそれが「キジムナー」……？ さて、赤い髪のキジムナーは、「アコークロー」すなわち昼と夜の間の黄昏時に、人間に対してどんな恐ろしい仕業を……？ また、それはなぜ……？ 「霊的なもの」の大好きな人にはお薦めだが、私には、こんなワケのわからない恐い映画はちょっと……？

🎬 「エイリアン」 vs. 「あまんじゃく」 vs. 「キジムナー」

『妖魔』『魔界都市』『妖獣都市』など多くの人気シリーズをもつ作家菊地秀行の短編小説を映画化した田中誠監督の『雨の町』(05年)のテーマは「侵略モノ」だった。すなわち「この世には古来から人間とは違うなにかが存在していて、隙あらば人間界に入りこもうとしている」という神話をテーマにしたもの。それが、ハリウッドでは「エイリアン」や「宇宙人」となり、日本の田舎村では「あまんじゃく」になるらしい(『シネマルーム11』364頁参照)。

しかして、沖縄ではそれが「キジムナー」。私なりの説明は難しいのでとりあえず、プレスシートにかかっている説明をそのまま引用すれば、それは次のとおり。すなわち「幽霊、精霊、妖怪……その存在を信じる者にとっても、正体が判然としないキジムナー。座敷童やカッパ、木の妖精など、伝えられる話によって性格や風貌も異なっている。また、名称も地域によってブナガヤ、ポーンマヤー、マージャ、セーマ、ミチバタ、マンジーなど多種多様。赤い髪の子どものような

姿で描かれることが多いが、確たるイメージ統一は成されていない」とのこと。

さらに、「よく知られているのは、キジムナーは魚の左目を好んで食べ、性格が人なつっこいという特徴。親しくなった漁師は、ともに海に出て、豊漁の恩恵を受けるが、ひとたび恨まれると執拗に呪われるらしい」からちょっと怖い……。そんなキジムナーの伝説を、絵本を読むことによって最初に鈴木美咲（田丸麻紀）に語ってくれたのは、「おばあ」と呼ばれている喜屋武秀人（結城貴史）の母親シズ（吉田妙子）だったが……。

美咲は伊東美咲ソックリ……？

本作で映画初主演を果たした女優は、東京から沖縄にいる恋人村松浩市（忍成修吾）の元へやってきた女性鈴木美咲を演ずる田丸麻紀。美咲がたった1人で沖縄までやってきた事情は、映画冒頭で紹介される「交通事故」。すなわち美咲が美咲の姉（清水美砂）の赤ちゃんをベビーカーに乗せて歩いていた時、姉からかかってきたケイタイに気を取られた瞬間、ベビーカーが勝手に動き出し、その結果赤ちゃんは……？ 何かとナゾめいた作り方が多いのがこの映画の特徴で、私に言わせればこの交通事故についての説明も少し不十分……？

また、美咲の恋人も、村松浩市という平凡な名前（？）からわかるとおり、元々の沖縄の住民ではなく、ある事情でこの地に移り住んできた若者だが、その事情も……。

私が、この映画を観ようと思ったのは、チラシで見たそんな田丸麻紀の顔が伊東美咲にそっくりだったから……？ もちろん見る角度や表情によってかなり違うのだが、ある角度、ある表情で見ると、ホントにソックリ……？ もっとも、こんな私の説に同調する人は少ないようだが……？

沖縄の才能を結集させたが……

この映画のタイトル『アコークロー』とは、チラシによれば、沖縄の方言で昼と夜の間を意味するとある。またプレスシートによれば、「沖縄の言葉で夕暮れ、薄明かり、黄昏を意味する言葉」、つまり「太陽が沈み、薄暗くなりかけたその頃に魔物が出没するとされ、とくに子供たちには魂を抜かれる恐ろしい時間帯と

教えられてきた」とのことだ。この映画を観るについては、最低限この程度の手備知識が必要……。

さらにこの映画は、長編映画初監督となる岸本司監督をはじめ、スタッフの多くが沖縄出身であるうえ、主役の田丸麻紀と忍成修吾の2人以外の脇を固める俳優の多くを沖縄出身者で固めている。したがって、私が聞いているとかなり違和感の強い沖縄方言やその独特のイントネーションも、彼ら彼女らにしてみれば当然のこと。とりわけ、強烈な印象を与えるのが、エリカが演ずる女流作家でありユタの顔をもつ女性、比屋定影美（エリカ）。ユタとは、霊的なものと人間を仲介する存在らしいが、私の耳には奇妙なアクセントに聞こえる、彼女が語る「お告げ」には、いろいろと複雑な意味が含まれているらしい……？

キジムナーは誰……？

プレスシートにある映画評論家、大久保賢一氏の「アコークロー、そして「赤」に宿る恐ろしい力」によると、キジムナーを扱った映画は他にもあるそうだが、それとこの映画のキジムナーとは異なるらしい。また、美咲が「キジムナー」に対して興味を示したのは、それなりの理由と合理性があるらしい。それは、美咲が交通事故によって姉の赤ちゃんを死なせてしまったことに対する悔恨と懺悔の気持。すなわち大久保氏の言葉によると、「母というもの」に対する彼女の強い感情がキジムナーにある形を与えることになる、とのことだが、さて……？

沖縄に移り住んでいる浩市の友人は、漁師の渡嘉敷仁成（尚玄）とその仲間の秀人。仁成は男の子仁太と一緒に生活しているが、彼には離婚した元妻の松田早苗（菜葉菜）がいた。そんな早苗が、この映画におけるキジムナー……？

なぜキジムナーが殴り込みを……？

この映画でキジムナーとなる早苗は、白い服を着た赤い髪の女として登場する。それはキジムナーの伝説を踏まえたものだからそれでいいのだが、なぜ早苗が仁成と離婚したのか、そしてなぜ早苗がキジムナーになっていったのかについての説明が不十分だから、どうもわかりづらい……？

早苗の精神が不安定になったのは、長男仁太に続く第二子を流産したためらし

いが、離婚した後、仁成と共に生活している仁太の元を早苗が訪れることを、仁成は極端に嫌がっていた。それは、早苗が異様な雰囲気で開催してくることに大半の原因があるようで、そのたびに仁成は早苗を実力で追い返していたが……。

たまたま、仁成の家を浩市と美咲が秀人と共に訪れていた時、早苗が登場したが、今日は様子がかかなりヘン……？ いつものように実力でこれを追い返そうとした仁成に対して、早苗はいきなり背後に隠し持っていた草刈ガマを取り出して仁成に切りかかってきたから、こりゃ大変……。仁成は足を斬りつけられ、止めに入った浩市も手足に傷を負ったが、はずみで誤ってカマを早苗の胸に突き刺したのが浩市。そのうえ美咲も、再度暴れ始めた早苗に対してとどめを刺すことに……。草刈ガマを持参してまで、早苗が仁成の元に殴り込みをかけてきたのは一体なぜ……？

事態の悪化は明らかに浩市の判断ミスのせい……？

ビックリさせられたものの、今浩市と美咲そして仁成と秀人の目の前には、白い服を赤い髪と同じように真っ赤に染めた早苗の死体が……。弁護士の私に言わせれば、これは明らかに正当防衛で、過剰防衛にもならないから、何も恐れることなく警察に届け出ればいいのだが、そうしたのでは「初めて明かされる琉球奇譚」の物語が成立しないことになる。そこで浩市の提案とイニシアチブにより、早苗の身体を布に包み、人里離れた奥地にある湖の底に早苗の死体を沈めてしまうことに……。

もともと、人間（の精神）はそんなに強いものではなく、いい人ほど良心の呵責があるもの……。またこんな場合、どちらかというとなりより男の方が弱いもの……。そんな私の読みどおり、この事件による変調はまず秀人に、次に仁成にそして遂に浩市にも……。キジムナーについてあれほど興味を示していた美咲は、こんな事件の影響を受けることなく、しっかりしたままだったのが面白いところだが……？

目玉をくり抜く姿は、私にはちょっと……？

冒頭に紹介したように、キジムナーは魚の左目を好んで食べるらしい……。そ

ここで、この映画のスクリーンに登場するのは、良心の呵責に苛まれた秀人が、湖の中に1人入っていき、自ら目の玉をくり抜こうとする姿。こりゃ私にはちょっとエグすぎる……？ また、秀人に続いて仁成も、自ら首を吊って死んでしまうというひどい最期に……。そして遂に、浩市の目の前には、再三早苗の幽霊が登場するようになったらしい。もっとも最初は、美咲にはその姿が見えず、浩市だけに時々見えていたようだから、ある意味で早苗の登場は浩市の幻覚ともいえるものだったが、ある時点からは、美咲の目にもはっきり見えるようになった。したがって、やはりキジムナーは実在するもの……？

再三再四のキジムナーである早苗の登場によって、浩市はかなり精神的変調をきたしているらしく、秀人と同じように自分の目の玉をくり抜こうとしたから大変……。一体いつになったらキジムナーの怒りは鎮まるのだろうか……？

さあ、ここでユタの登場だが……

キジムナーが霊的な力を持ち、キジムナーに恨まれた人間は執拗に呪われるとしたら、他方、ユタはそのキジムナーの呪いを鎮める能力があるらしい……。したがって、早苗キジムナーの怒りを鎮めることができるのは、ユタとしての能力をもつ比屋定影美しかなかった。

この映画後半の見どころは、そんな影美の大活躍だが、さて影美は一体どんな方法で早苗の怒りを鎮めるのだろうか……。それはあなたの目でしっかり確かめてもらいたいが、どうせならもう少し早く登場し、活躍してほしかったと思ったのは私だけ……？

2007(平成19)年5月1日記